

J A 御 中
(営農担当部署)

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局: JA福岡中央会 担い手・営農サポートセンター)
(公 印 省 略)

〔 緊 急 〕

営農情報 1 4

台風13号接近及び長雨に伴う技術対策について

1 台風13号接近に伴う技術対策

気象庁によると、台風13号が北上し、9月6日から7日にかけて九州北部に接近する恐れがありますので、下記の事項を参考に、技術対策の実施をお願いします。

留意事項

ほ場・農業用施設の見回りは、気象情報を十分に確認し、大雨や強風がおさまるまでは行わないで下さい。また、大雨等が収まった後の見回りにおいても、増水した水路など危険な場所には近づかず、人命を最優先に事故防止の徹底に努めてください。

1 水 稲

- 収穫期となっているほ場は、可能な限り台風襲来前に収穫を行う。
台風通過後に収穫する場合は、落水管理とし、台風通過後速やかに収穫する。
- 収穫まで日数を要するほ場は、倒伏及び稲体表面からの異常蒸散による「急性萎凋症状」の発生を防ぐため、深水管理を行う。
台風通過後の数日間は、ほ場の水を切らさない程度に、浅水管理とする。
- 成熟期が近いほ場で倒伏した場合は、台風通過後早急に落水し、穂発芽を防止する。
- 倒伏が発生した場合、高水分分が荷受けされるため、共乾施設は乾燥時間がかかることを想定し荷受けを行う。
- 冠水した場合には、早急に排水を図り、冠水時間を短くする。十分な排水ができない状況でも、葉の先端が水面から出るよう最大限の努力をする。排水後は、できるだけ新しい酸素を含んだ用水との入れ替えを実施する。
いもち病とともに、白葉枯病、紋枯病の発生に留意し、発生に応じ対策をとる。

2 大 豆

- 台風接近前に、雨による停滞水を出来るだけ早くほ場外に排出するため、畦溝や排水溝の整備を行う。
- 台風通過後、大雨でほ場内に停滞水がある場合は、本暗きよの栓を開けて排水する。
また、畦溝や排水溝の再点検・整備を行う。
- 葉焼病の発生に留意し、発生に応じ対策をとる。

(次頁、「長雨・日照不足に関する対策」もご覧ください)

2 長雨・日照不足に関する技術対策

1 水 稻

生育ステージの違いによる長雨・日照不足の影響

登熟期 → 粒の充実不足や白未熟粒の発生が増加し、いもち病が多発しやすい。

成熟期 → 刈り遅れによる品質低下や穂発芽の発生が懸念。

●いもち病対策

いもち病の発生適温は 20～25℃で、穂いもちの被害が大きくなる感染時期は出穂後 3 週間までである。

防除時期は、晩生品種で出穂直前と穂揃い期、出穂している品種で穂揃い期。

●水管理

長雨により湛水状態が続いたほ場では、間断かん水の励行により、根への酸素供給で稲体の健全化を図る。

●適期収穫

成熟期に達した水稻は、穂発芽の発生を回避するため、収穫可能になり次第、速やかに収穫を実施し、収穫した籾は素早く適切に乾燥。

※ 穂発芽が多発した場合は、収穫前に J A 及び農業共済組合に連絡する。

2 大 豆

長雨・日照不足の影響

湿害による生育不良、莢数・粒数の減少、紫斑病の多発が懸念。雑草の発生も多くなりやすい。

●排水対策

停滞水がある場合、本暗きよの栓を開け、中耕・培土でできた溝と排水口を確実に繋ぐ。

停滞水の排出が困難な場合、乗用管理機等の車輪跡がはっきりつく程度になったらうね間を走行するなど、早めに根圏に酸素を供給する方法を講じる。

●雑草対策

イネ科雑草が多い場合は、中期除草剤の散布を実施する。アサガオ類や広葉の難防除雑草が多発する場合は、うね間処理を検討する。

●追肥

生育量が少なく、葉の黄化がみられるほ場は、窒素成分で 2 kg/10a の速効性肥料を追肥し、生育を回復させる。

また、試験的だが、開花後 9 日に尿素の葉面散布（窒素成分で 2 kg/10a、水 100L 希釈）し、収量がやや向上した事例はある。

●紫斑病対策

紫斑病は、発生適温 15～20℃で、多湿条件を伴うことで発生。特に結実期に雨が多く、涼しい天候が続いた場合に多発しやすい。

防除実施時期は、開花後 3～5 週間に 1～2 回、カメムシ類と同時防除により実施する。

以上